

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：12102  
 研究種目：若手研究(B)  
 研究期間：2013～2014  
 課題番号：25770171  
 研究課題名(和文) 屈折・派生形態論の融合のための分散形態論を用いた日本語の活用・語構成の研究  
  
 研究課題名(英文) A Distributed Morphology Study of Japanese for Unifying Inflectional and Derivational Morphology  
  
 研究代表者  
 田川 拓海 (TAGAWA, Takumi)  
  
 筑波大学・人文社会系・助教  
  
 研究者番号：20634447  
  
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、派生形態論と屈折形態論を統合した形で取り扱える分散形態論という新しい形態統語理論を用いて、日本語における形と意味の関係を解明する新たな研究モデルを提示することを目指した。

具体的な成果としては、1) 派生形態論については、連用形についても終止形についてもその形態と統語構造の関係は複雑であることをこれまで研究が少なかった現象を対象に示し、2) 屈折形態論については、連用形名詞に統語的に動詞からの派生を経て存在することを明らかにし、先行研究の分析の精緻化が必要であることを示した。またより包括的な派生名詞研究のために複合動詞と対応する連用形名詞のデータベースを構築・整備した。

研究成果の概要(英文)：This study proposes a new theoretical model which can explore relationships between forms and meanings in Japanese by using a rapidly developing morphosyntactic theory, Distributed Morphology, which treats inflectional and derivational morphology in a unified architecture. The main achievements are as follows; 1) Discovering new phenomena which show that relationships between verb inflection and syntactic natures, in particular, existence of tense are complicated from the viewpoint of inflectional morphology in addition to previous studies, 2) Showing that there are evidences that support the existence of 'ren'yoo-kei' nominals which are derived from verbs syntactically against a previous study in Distributed Morphology, 3) Constructing a database of 'ren'yoo-kei' nominals which correspond to verbal compounds.

研究分野：理論言語学(形態論)

キーワード：日本語 時制 ル形・終止形 連用形 派生名詞 派生形態論 屈折形態論 分散形態論

1. 研究開始当初の背景

いわゆる国語学・日本語学と呼ばれる研究領域では活用(形)についての多くの研究の蓄積がある一方で、形式的な理論言語学的研究では動詞の活用の体系的な研究はほとんど試みられてこなかった。これには、生成文法統語論および現代日本語記述研究のどちらにおいても形態論的な問題にあまりこだわらないことによって、文法・意味研究を爆発的に発展させることができたという研究史的背景があるものと思われる。しかし理論言語学も日本語の記述研究も大きく発展をとげた現在、再び形態の分布を中心として日本語における形と意味の関連という問題に取り組み基盤が整ってきたと言える。

そのような状況のさきがけとして、本研究代表者は分散形態論(Distributed Morphology)という新しい形態統語理論を用いて動詞連用形の分布が活用体系における非該当形(elsewhere form)として捉えられることを個々の具体的な分析を基に明らかにしたが、この分析は他の活用形態、特に終止形の分布に対する詳細かつ具体的な分析によっても検証される必要があった。終止形の出現には時制句(T(ense)P)との関連だけでなく、定性(finiteness)およびそれを担う機能範疇(Fin(inite)P)との関わりについても考える必要があることが近年指摘されるようになってきた。

2. 研究の目的

本研究は、形式的な形態論研究を中心に据えることによって、日本語における形と意味の関係を解明する新たな研究モデルを提案することを目的としている。

具体的には、1) 分散形態論(Distributed Morphology)という新しい形態統語論のモデルを用いて、2) 屈折形態論:日本語の動詞のいわゆる終止形と命令形を中心とした活用と述部の形態論・形態統語論・形態音韻論に関する現象 および 3) 派生形態論:連用形名詞(例:泳ぎ)と動詞由来複合語(例:草刈り)を中心とする語形成に対する記述と分析を行い、述語の形態と句/節構造、特に時制/定性(finiteness)との対応関係を明らかにすることを旨とした。

3. 研究の方法

<A> ル形(終止形)の研究>

1) まず動詞のル形が生起する文法環境をできるだけ網羅的にリストアップする作業を行う。さらに、2) それらの文法環境をタ形が生起可能かどうかによって分類する。たとえば条件のト節、ヨウニスル節、ベキの補文、否定命令文などはいずれもタ形が生起不可能である。3) 最後にそれぞれの文法環境の持つ特性が機能範疇 FinP において「不定(non-finite)」を仮定することによって捉えられるか個別に検証する。

<B> 語形成の研究>

連用形名詞の研究については、先行研究ではある程度の記述はなされてきたものの、対象となる連用形名詞の範囲が限られていたという点に鑑み、できるだけ多くの連用形名詞の例を採集することからスタートする。収集した連用形名詞を対象に伊藤・杉岡(2002)で提示された意味論的な観点から詳細な分類を行う。さらに、先行研究ではまだ現象自体の報告が無い、形容詞派生動詞などすでに何らかの派生を経たもの、受動・使役形態素が含まれているもの、対応する動詞が統語的複合動詞であるもの、などの具体例も採集する。

このようにして収集したデータを基に、分散形態論を用いた統語論的アプローチによる分析を行う。連用形名詞には語彙的な性質もあれば、統語的な性質も見られ、これは従来の語彙的アプローチではなく、その連続性を捉えられる統語論的アプローチによってより妥当な分析が得られると思われる。統語論的アプローチには従来語彙的な性質が捉えにくいという難点があったが、それは分散形態論によって近年研究が進められている(Root)という概念を用いれば克服することが可能である。

4. 研究成果

(1) 時間節を形成するシダイ節(例:荷物が着き次第、出発します)は、述語は連用形でも統語的には時制に関わる要素が存在する従属節であることを示し、活用と統語構造のずれに関する新たなデータを示した。さらに、シダイ節に関する詳細な記述を行い、節内に「する」を伴わずに動名詞が生起可能であること、節内に生起する述語には制限があること、を内省、コーパスの両面から明らかにした。この成果は形式副詞研究や、節構造、名詞性、などについて新たなデータと知見をもたらすものである。

(2) 現代日本語(共通語)において、「か」による選言等位構造の第一等位節に述語動詞がル形を取るが統語的には時制句が現れない文法環境が存在することを生成文法統語論の観点から明らかにした。これは「か」の第一等位節に生起するル形に、1) 節内に時制句(TP)は存在するが過去/非過去の対立がないもの、2) 節内に時制句そのものが存在しないものの二つのタイプが存在するというを示している。これは活用形と統語的性質の関係が様々な従属節ずれを見せることを示す新たな現象の一つである。

(3) 単純運動用途対応する動詞連用形の形態をとる名詞(「泳ぎ」など)が動詞からの派生ではなく範疇未指定の要素

Root が直接名詞化したものであるとする先行研究、Volpe (2005)の分析について、1) モーラ数に関する制約、2) 自他交替に関わる形態、3) 形容詞派生動詞、4) 受動/使役形態素、の四つの観点から経験的な問題があることを明らかにし、Root が一度動詞化されそれがさらに名詞化された、すなわち動詞派生の連用形名詞が存在することを明らかにした。

- (4) 今後のより包括的な派生名詞研究のために、複合動詞と対応する連用形名詞についてもデータベースを構築し、容認度、語アクセント、意味タイプなど基本的な情報を整備した。そのデータベースを用いて先行研究の記述を検証し、A) 複合動詞の連用形名詞の生産性(容認度)は後部要素の長さの影響を受ける、B) 複合動詞の連用形名詞の生産性(容認度)は全体が長くなるほど安定するとは言えない。C) 複合動詞の連用形名詞の語アクセントはほぼ全て平板式である、D) 複合動詞の連用形名詞はデキゴト名詞になりやすい、ことを明らかにした。
- (5) 動詞由来複合語(例:子育て)については、先行研究によって主張されてきた一般化に対して検証を行い、特に「内項の複合には「する」が直接付くことはできない」については、多用・多量の反例が存在することを新聞コーパスから採取したデータによって示した。
- (6) 各現象の分析において分散形態論による分析の有用性と問題点を具体的に示し、形態論的現象に統語的局所性が関わっている可能性と、その理論化の方向性を提示した。具体的には感循環異形態(Cycle-Sensitive Allomorphy)を取り上げ、日本語においては「する」とその可能の補充形である「できる」の分布とその分析に有用なモデルを提供できることを示した。

#### <引用文献>

Volpe, Mark (2005) *Japanese Morphology and its Theoretical Consequences: Derivational Morphology in Distributed Morphology*. Ph.D. dissertation, Stony Brook University.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4件)

1. 田川拓海 (2015) (印刷中) 「「する」と「できる」の具現に対する感循環異形態分析」『KLS 35: Proceedings of the Thirty-Ninth Annual Meeting of The

Kansai Linguistic Society』. 査読有り

2. Tagawa, Takumi (2015) (in press) "Universals in Comparative Morphology: Suppletion, Superlatives, and the Structure of Words," *English Linguistics* 32(1). 査読有り
3. 田川拓海 (2014) 「時間節を形成する形式副詞シダいの性質と節構造」宋協毅・林常楽(編)『日本語文化研究第五集』, 106-112, 大連理工大学出版社. 査読無し
4. 田川拓海 (2013) 「動詞派生か Root 派生か 分散形態論による連用形名詞の分析」『文藝・言語研究 言語篇』64, 59-74. 査読有り

[学会発表](計 13件)

1. 田川拓海・松浦年男 (2015) 「複合動詞の連用形名詞データベースの構築」レキシコン・フェスタ3(国立国語研究所(東京都立川市) 2015年2月1日)。
2. 田川拓海・庵功雄・岩本遠徳・田村早苗 (2014) パネルセッション「日本語のテンス・アスペクトを問い直す」日本語文法学会第15回大会(大阪大学豊中キャンパス(大阪府豊中市) 2014年11月23日)。
3. 田川拓海・松浦年男 (2014) 「複合動詞の連用形名詞データベースの構築とそれに基づく諸仮説の検証: 生産性・語アクセント・意味特徴」日本言語学会第149回大会(愛媛大学城北キャンパス(愛媛県松山市) 2014年11月16日)。
4. 田川拓海 (2014) 「愚痴命令文と終助詞」TwiFULL 札幌言語学ミーティング(札幌ハウスユースホステル(北海道札幌市) 2014年10月19日)。
5. 田川拓海 (2014) 「「か」等位節における時制と形態の不一致への形態統語論的アプローチ」日本語学会2014年度秋季大会(北海道大学(北海道札幌市) 2014年10月19日)。
6. 田川拓海 (2014) 「不定(形)としてのル形と節構造」第135回関東日本語談話会(学習院女子大学(東京都新宿区) 2014年9月6日)。
7. 田川拓海 (2014) 「「する」と「できる」の具現に対する感循環異形態分析」関西言語学会第39回大会(大阪大学豊中キャンパス(大阪府豊中市) 2014年6月15日)。
8. Tagawa, Takumi (2014) "Cycle-Sensitive Suppletion in Japanese," GLOW in Asia X at National Tsing Hua University, Hsinchu, Taiwan, 2014/5/24.
9. 田川拓海 (2014) 「音形の有無は項の認可を左右するか」ワークショップ「項と格の具現への形式的アプローチ」(筑波

大学（茨城県つくば市）2014年3月7日）。

10. 田川拓海 (2013) 「シダイ」の節構造：時制・動名詞・格」日本言語学会第147回大会（神戸市外国語大学（兵庫県神戸市）2013年11月24日）。
11. 田川拓海 (2013) 「三つのナクナルと一語性」筑波大学日本語日本文学会第36回大会（筑波大学（茨城県つくば市）2013年10月5日）。
12. 田川拓海 (2013) 「時間節を形成する形式副詞シダイの性質と節構造」第五回中・日・韓日本語文化研究国際フォーラム（大連大学（中国・大連）2013年9月22日）。
13. 田川拓海 (2013) 「動作動詞句を形成する「形容詞ク形+する」の性質と構造」Morphology and Lexicon Forum 2013（慶應義塾大学日吉キャンパス（神奈川県横浜市）2013年9月8日）。

〔その他〕

連用形名詞データベース（複合動詞）  
（[http://researchmap.jp/mu6qkj4p-1793661/#\\_1793661](http://researchmap.jp/mu6qkj4p-1793661/#_1793661)）

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

田川 拓海 (TAGAWA, Takumi)  
筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：20634447